愛し合う群れとなるために　　**ヨハネ 15：9〜12，22-25**

今日の箇所は主イエスが十字架を前にして最後の晩餐において１２弟子たちに語られたところです。人は近い関係にある者同士、愛し合う場合もあれば、憎しみ合うような関係の場合もあります。例えば家族であることによって親しく麗しい関係の場合もあれば、逆に家族間に争いが絶えないこともあります。今日の主イエスが語っておられる十二弟子達は最後まで弟子の中で誰が一番偉いかと競い合い、最後は自分が危ないと思うと、蜘蛛の子を散らすように逃げ、ペテロは主イエス・キリストを知らないと言い通しました。しかしキリストの復活後、彼らは救われた多くの信徒を導き、教会を建て上げ、弟子たちの交わりだけでなく教会自体愛し合う群れを形成してゆきました。私たち、キリストの弟子は、人生のある時にキリストに出会い、信仰を持ち、今この教会につながる者とされています。地上の教会には二つの可能性があります。ここでキリストにつながっている者同士麗しい愛の交わりを体験する可能性もあれば、逆にこれなら世の中のつながりの方がもっと気楽で良いといった思いで終わってしまう可能性もあります。今日はどのようにしたら教会が愛し合う群れとなるのか？聖書から学びたいと思います。

１）私たちは「愛」と「憎しみ」の現実を見なければならない。

聖書に愛のことを書いた箇所と憎しみについて書かれている箇所とがあるように、世の中には「愛」と「憎しみ」があります。「愛」という言葉には温かい響きがあり、「憎しみ」という言葉には冷たい響きがあります。英語で ″love″ と言うときには、柔らかく発音できますが″hate″ と言うときには、力を込めないと発音できません。「愛」はドイツ語で（リーベ)、フランス語で（アムール)、スペイン語で（アモール)、中国語で（アイ)、韓国語で（サラン）と言われます。どれもきれいな響きです。ところが「憎しみ」例えばヘイトはきつく聞こえます。言葉の響きはその内容をあらわしているのかもしれません。

聖書は「人は神のかたちに造られた」と教えています。神は愛ですから、神のかたちに造られるとはもともと神の愛を持つものとして造られたと言えます。もう少し正確に言うなら神に愛されていることを感じることが出来る者として造られたということです。家族が、隣人が、そして、世界中の人々が互いに愛しあうこと、それは、愛の神によって造られた人間にとって自然なこと、キリストの愛によって贖われたクリスチャンにとって当然と言えます。しかしこの人間にとって自然なこと、クリスチャンにとって当然のことができないでいるという現実があります。聖書はそれを「罪」と呼んでいます。

アダムはエバを与えられたとき、「これこそ、今や、わたしの骨からの骨、わたしの肉からの肉」（創世記 2:23）と言ってエバを愛しました。ところが、神の言葉に背いて罪を犯したあと、アダムは、エバのことを「あなたが私のそばに置かれたこの女」（創世記 3:12）と言いました。自分の責任をエバになすりつけたばかりか、神のせいにまでしました。人が神に背を向けるとき、人は愛を失うのです。あの１２弟子たちもそうでした。主イエスがおられたので最後は麗しい愛の交じわりとなっていったのです。そして、こうも言えます。愛が失われるところに、愛と正反対の憎しみが生まれるのです。

アダムの子どものカインはねたみのため弟のアベルを殺しました。聖書に「欲がはらむと罪を生み、罪が熟すると死を生みます」(ヤコブ 1:15) という言葉がありますが、そのとおりのことが起こったのです。罪の結果が死であるというはその通りです。罪は、憎しみを生み、そして憎しみは死を生むのです。憎しみは人を狂わせ、他の人のものを、その命さえも奪いとるのです。そんな現実が世界中いたるところにあります。人は互いに愛しあうことによって共に生かされ、幸いなものとなるのですが、残念ながら人間の歴史は、カインとアベル以来、憎しみの歴史となってしまいました。今のウクライナへのロシア侵攻を見ると文明や科学技術がこんなに進んでいるのに人間の心は何も変わっていないことを思い知らされます。

主イエスが十字架で死なれたのは、わたしたちの罪の身代わりのためであり、深い神のみこころによるものですが、人間の側から見れば、主イエスもまた、憎しみによって死に追いやられました。イエスを最も憎んだのは、こともあろうに、ユダヤの宗教家たちでした。彼らはイエスが語ったことにことごとく反

対しました。イエスの教えが間違っていたからではありません。正しかったからです。間違った者は正しい者を憎みます。偽物は本物を嫌います。自分が間違っていること、自分が偽物であることが明らかになるからです。恥を見るからです。ヨハネ 3:20 に「悪いことをする者は光を憎み、そのおこないが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない」とある通りです。

ユダヤの宗教家たちは、イエスが「父」と呼んだ、まことの神を知っていました。彼らも神を「父」と呼びました。しかし、イエスがその父の御子であることを認めませんでした。自分たちは神を敬っていると言いながら、御子イエスを憎みました。イエスが「わたしを憎んでいる者は、わたしの父をも憎んでいるのです」（ヨハネ 15:23）と言われた通り、彼らにはほんとうの意味で父なる神を敬う思いがなかったのです。

今も、信仰に反対する人たちが「神がいるなら見せてみろ」と言うように、当時イエスに反対する人々も「おまえが神の子だというなら、父を見せてみろ」と言いました。イエスは、数々の奇蹟によって、父なる神を示し、ご自分が神の御子であり、聖書が預言している救い主であることを証明なさいました。なのに、人々はなおも、イエスを拒み続けました。「もしわたしが、ほかのだれも行ったことのないわざを、彼らの間で行わなかったのなら、彼らには罪がなかったでしょう。しかし今、彼らはわたしをも、わたしの父をも見て、そのうえで憎んだのです。」（ヨハネ 15:24）とイエスが言われたのはそのことを指しています。「神をよく知っている」と言う人たちが、じつは「神を憎んで」おり、そのことに気付いていない、気付いてもそれを悔い改めないというのは恐ろしいことです。

イエスは、「彼らは理由なしにわたしを憎んだ」（25 節）という言葉を引用されましたが、イエスに反対した人たちは正当な根拠なしにイエスを憎みました。「憎しみ」というものはたいていそうです。おとなは、文化、風習、宗教、人種、肌の色の違いなどで憎しみあっていますが、ちいさなこどもたちは、肌の色や服装、言葉が違っていても、からだが不自由であっても、わけへだてなく、仲良く遊びます。偏見から作り出した憎しみをこどもの心に植え付けているのはおとなです。そこからいじめが生まれ、憎しみの連鎖が起こるのです。子どもはおとなから学んでいるのです。今日、おとなたちは、人を愛すること、他の人を大切にすることをこどもたちに本気で教えているだろうかと心配になります。学校でのいじめがいっこうになくならない、高校生が同級生を殺すなどといった異常な事件が起こるのは、愛を失った社会にも原因があるように思います。わたしたちが、このような社会の中でも正しく生きるために、また、このような社会が愛を取り戻すことができるために、イエス・キリストは何をしてくださり、わたしたちには何ができるのでしょうか。

２）イエス・キリストこそ真実な神の愛

ユネスコ憲章に「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」と書かれています。この「平和のとりで」は「愛のとりで」だろうと思います。戦争は「憎しみ」から生まれ、それは戦争をエスカレートさせますが、平和は「愛」から生まれ、愛は平和を促進します。

イエス・キリストは、ご自分が人々の憎しみの対象になり、十字架で死んでいかれることによって、人類の罪をその身にすべて引き受けられました。イエス・キリストが何か人に憎まれるような非常識なことをしたから憎まれているのではありません。イエスは感謝されこそすれ、憎しみなど受ける必要などないのです。それでもイエス・キリストは人の罪ゆえに起こる憎しみや殺意をご自分が受け止めてくださり、それが主イエスを十字架に至らせることになったのです。そしてついに十字架は憎しみを終わらせたのです。イエスは十字架で死なれ、信じる者を罪から救うだけでなく、三日目に死人のうちから復活され、信じる者の心のうちに「平和のとりで」、また「愛のとりで」を築いてくださいます。わたしたちはイエス・キリストの救いによって、神がわたしたちのうちに造ってくださった「愛のかたち」を取り戻し、そ

れを成長させていくのです。

信仰によってイエス・キリストにつながったとき、わたしたちはキリストの愛につながりました。キリストに愛され、キリストを愛する者となりました。ぶどうの枝がぶどうの木につながっているなら、かならず実を結ぶように、キリストの愛にとどまっているなら、わたしたちはかならず、愛の実を結ぶことができます。他の人をほんとうに愛せるようになります。

初代教会の時代から、クリスチャンはお互いを「兄弟・姉妹」と呼び合ってきました。クリスチャンはみな、おひとりの父から「神の子ども」として生まれたのですから、お互いは「兄弟・姉妹」です。初代のクリスチャンは「兄弟愛」を実践し、互いに愛しあうことによって、神の愛をあかししました。迫害の時代にどんなに苦しめられても、クリスチャンは互いに愛しあいました。迫害する人たちでさえ、その兄弟愛に感嘆したほどでした。イエスが「もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」（ヨハネ 13:35）と言われたとおりでした。

クリスチャンはまず、教会で神の愛を知り、愛しあうことを学びます。教会は神の国の出先機関のようなところです。教会はこの世にありますが、この世の原理によって動いてはいません。世の中では力ある人がリーダーになっていますが、教会ではイエス・キリストが主です。わたしたちはここで、主の愛を学び、それに従うのです。教会は、キリストの学校です。ここで神を愛し、人々を愛することを学んで、はじめて家庭で、学校で、職場で、神に従い、人々に仕えることができるようになるのです。ヨハネ第一 3:16 に「キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。」とあります。「兄弟のためにいのちを捨てる」とは、とても強いことばです。もちろん自分のいのちを差し出すような状況に出会うのは、ごく稀で特別なことでしょう。しかし、イエス・キリストがどれほどわたしたちを愛してくださったかがほんとうの意味で分かるなら、それほどの愛を持ちたいと願うようになるのではないでしょうか。神は私たちに愛を教えるためにイエス・キリストをくださいました。すべてはキリストの愛から始まります。このお方の大きくて広く、高くて深い愛を学び続けましょう。

神は、また、わたしたちが愛することを訓練されるために教会の兄弟・姉妹をくださいました。まず、教会で、キリストにある「兄弟愛」を学びましょう。共に学び、祈り、共に奉仕する中で、身近な兄弟・姉妹のために心を配ることを教えられたいと思います。わたしたちはそうしてはじめて、家庭に帰り、職場に戻り、学校に行っても、そこで真に他の人を尊ぶことができるようになるのです。人の弱さや欠けたところが見えたなら、その人のために祈り、状況によってはこの私が助けるために神はそれを私に見せてくださっていると受け止めたいと思うのです。たとえこの世からどんなに憎まれたとしても、憎しみをもって返さない。それがこの世の憎しみの原理に影響されないということです。むしろ、そのような時だからこそこの私がキリストの愛の光を届けていく。キリストによって、そんな自分の力以上のことができるようになるのです。主イエスが「わたしの愛にとどまりなさい」と言われたことに耳を傾けましょう。私たちは互いに愛し合うために教会に集められています。それが難しいという人には主イエスがまず「私があなたがたを愛したように」と言われたことを思い起こしましょう。「あの人をどうやって受け入れろと言うのだ」と怒ったり、心かたくなにしないで、他人のことは良いのでまず主イエスが私をご自身十字架にかかるほどまで愛してくださったことをよく思い浮かべてみましょう。それから「互いに愛しあいなさい」と言われたように人を愛してゆくことを実行したいと思うのです。この週も、互いに愛しあうことによって、キリストの愛をあかししていきたいと思います。